

ワクワク留学体験記

Evan Douglis Studio ニューヨーク

児玉幸子（電気通信大学）



児玉幸子 スパイラル習作 於 Evan Douglis Studio

1. はじめに

NY を初めて訪れたのは 12 年ほど前。博士課程の学生だった時である。ボストン MIT のドミトリーに 1 ヶ月ほど滞在し、MIT ミュージアムの所蔵品を見学し、当時お元気で活躍されていた Stephen Benton 教授の研究室を訪れたりした後、NY のイーストビレッジの Rudie Barkhout のスタジオを訪ねた。当時ルディーはホログラフィーアーティストとして活躍していて、アパートの地下室に作られた除振台は噂どおり大きく、作品を見ながら彼が発明したテクニックを聞くのは興味深かったが、何よりも、初めての NY に私は興奮して、前日は眠れなかった。今回、ルディーを再び訪れたかったけれど、前年なぜか中東で亡くなった後だった。

その次に NY を訪れたのは 2006 年。インターネットの様々なサイトで紹介されていた拙作「モルフォタワー」の映像を見た建築デザイナー、Evan Douglis 教授が、ブルックリンの Pratt Institute の建築学部の春の特別講義の講師として招待して下さったことがきっかけで、その後交流が続いた。

驚いたのは、ドグリス教授が、会ったことのない私を、インターネットで作品を見ただけで NY まで呼んだことだ。その理由は後からわかったのだが、アメリカ人の行動の速さに驚いた一件だった。ドグリス教授だけでなく、私が自分の HP に、作品の動画をアップロードして数日後、その作品に対して展覧会への出展依頼状が FedEx で届いたことがあり、アメリカ人の決断と行動の速さには驚くことが多いものである。・・・それはアメリカに限ったことではないのかもしれないが、2001 年のシーグラフで作品「突き出す、流れる」を展示した折、アートギャラリーに展示中、オーストリアの企業から、そのまますぐに北イタリア湖畔にある別荘まで社長に会いに来てくれと頼まれ、航空券を受け取り訪問したこともある。理由を聞くと、

「あなたの作品が一番良かったから」。世界には多種多様なチャンスを即座に提供する人がいるのである。

2. Evan Douglis Studio と RPI

今回、私が研修に行く直前、ドグリス教授は Pratt から同じ NY 州の RPI (Rensselaer Polytechnic Institute) に建築学部の学部長として異動された。そのため、研修の受け入れ先を美大として知られる Pratt Institute から、工学部が強い RPI に変更した。私は RPI の客員研究員となって、ブルックリンにあるドグリス教授のスタジオで日々の研修を行うこととなった。

ドグリス教授は、クーパーユニオンとハーバード大学で建築を学ばれ、ロンドンの Architectural Association に留学、Pratt で教鞭をとられる前は、コロンビア大学で務めておられた。建築を中心とした広い人脈をもち、美術にも造詣が深くていらっしゃる。

著書『Autogenic Structure』(Taylor&Francis, 2009 年)の中では、ファブリックと CAD を使って、自律的な造形原理を実験している。理論的研究を推進しつつ、実際の建築プロジェクトに進展させ、セラミックやガラスなど素材の特質を生かして、複雑に生成される有機的な曲面を持ち味とした独創的な建築デザインの数々を手がけている。

RPI で私は、10 月上旬に特別講義を行った。私のほかに、写真家の Kim Kever, 建築家の Zbigniew Oksiuła が参加した。また、EMPAC (Experimental Media and Performing Arts Center) や、バイオテクノロジーセンター、ナノテクノロジーセンター等の研究施設を見学させて頂いた。EMPAC では、ZKM の研究室との共同プロジェクトを進めており、バイオテクノロジーセンターでも、滞在する芸術家を募集していた。先進の施設が素晴らしい RPI はブルックリンのスタジオからアムトラックで

数時間と遠く、通えないことは残念であった。

3. NYU ITP, UCLA DMA, Parsons The New School

NY で作業等を手伝ってくれた Joanna Cheung という学生がいる。Pratt を卒業したばかりの彼女は、携帯電話を使ったメディアアートの作品を作っており、ニューヨーク大学 (New York University) の Tisch School of the Arts に設置された2年間のプログラムである ITP (the Interactive Telecommunications Program) を目指していた。私は、以前お世話になったことのある UCLA の DMA (Department of Design Media Arts) の大学院も良いのではと助言した。結局両方合格し、私も嬉しかった。

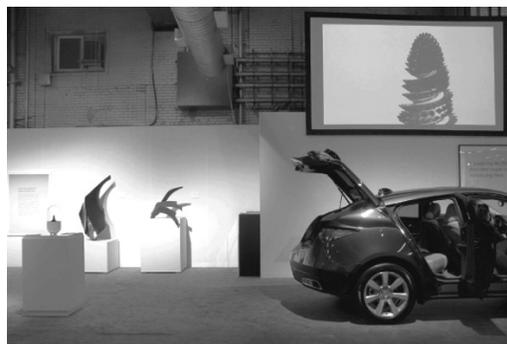
メディアアートを扱うことで有名な Bit Forms Gallery で個展を開催したばかりの Daniel Rozin も、NYU ITP を卒業している。学生の卒業展覧会を見に行ったが、非常に活気があった。完成度が高くない作品も少なくないが、VRに関わりの深い技術を使って作品を作る若者の熱気が伝わってきた。

今年2月には、UCLA でデバイスアートシンポジウムが開催され、岩田先生や草原先生、稲見先生、八谷和彦さん、土佐信道さん達と共に参加し、現地の学生や教授陣とも交流を深めた。私のセッションの司会者のメディアアーティストで UCLA 教授の Victoria Vanessa の紹介で、3月には NY の Parsons The New School for Design において、磁性流体のアートプロジェクトをレクチャーすることになった。その懇親会で、Parsons でのモデレーターでメディアデザインを研究している Katherine Moriwaki 達から、Fashioning technology の状況について伺った。私は児玉研の学生達 (かすやきょうこ、よしだともふみ) のテクノ手芸の活動について話した。

4. The Armory Show 2010 New York

NY に着いてすぐ、広告代理店から Acura のプロモーションでの作品の展示について打診があった。作品で、現代美術ファンのような層に新車をアピールする戦略という。W ホテルなどデザイナーズホテルを会場とした新車発表会のほか、Acura がスポンサーを務めるアメリカ最大の美術展示会アーモリーショーや、新しく始まったシカゴの NEXT という美術展示会もスケジュールに組み込まれていたため、一般の人々が多数訪れるパブリックスペースに作品展示する機会と考えて、文化庁に許可を得てから、展示を行うことにした。

アーモリーショーの展示が始まって2日目のこと。作品が、壁際からスペースの中央に移動されていた。初日



The Armory Show 2010 での「モルフオタワー」展示 (Pier34, New York)

の展示が終わった時、アーモリーショーのスタッフ達が来て、「この作品は重要なので目立つ位置に」と配置を変えてしまったのだ。嬉しい出来事だった。会場では多くの友人・知人が来てくれ、UCLA, RPI, Parsons, Pratt の学生、ブルックリンのスタジオの同僚とその仲間達、スタジオ近隣のアーティスト、また、NY のギャラリストとも展示会をきっかけに交流が生まれた。

5. おわりに

NY に滞在中、スタジオのスタッフ、現地の友人達から非常に助けられ、教えられた。ドグリス教授からは物質と造形に対する考え方を多数のドローイングを交えて教わった。独創的な建築デザイナーとの交流には、1年前にマドリッドで体験したのとはまた全く別の深い衝撃があったが、この短い文章では書くことは難しい。日本で育った私の、素材・空間・造形・光に対する感性とは異なる、別の文化の中で研ぎ澄まされてきた感性。教授のアシスタントである David Mans 氏にも、たいへんお世話になった。NY を去る直前、進行過程を身近に見ていたレストランのプロジェクトがジェームズ・ビアード賞のレストラン部門にノミネートされたことは喜ばしいことだった。

ドグリス教授をはじめ、支えてくださったアメリカと日本の皆様にお礼を申し上げます。

【略歴】

児玉幸子 (こだまさちこ)

電気通信大学情報理工学研究科准教授、メディアアーティスト。筑波大学芸術学研究科芸術学専攻修了。文化庁メディア芸術祭インタラクティブ部門大賞、デジタルコンテンツグランプリアート部門最優秀賞、2008年日本 VR 学会論文賞ほか受賞。2009～2010年、文化庁新進芸術家海外研修制度により NY 滞在。